

実践レポート

ふるさと坂出に架かる瀬戸大橋について考える

～郷土を愛する生徒の育成をめざして～

坂出市立坂出中学校
教諭 池下 倖

1 はじめに

坂出市で暮らす本校の生徒は、四国の交通網の1つである瀬戸大橋がとても身近な存在であると同時に、生まれたときから近くにあり、その価値や存在意義について考える機会が少ないため、大半の生徒があって当たり前だと思っている。しかし架橋以前、本州と陸路で繋がることができる橋の開通は、島である四国にとって長年の悲願であり、特に最初に四国と本州を繋いだ瀬戸大橋は、四国の人々にとって「夢の架け橋」でもあった。そのため、社会科地理的分野の授業や道徳科の授業、体験学習などを通して、ふるさと坂出に架かる瀬戸大橋について考える機会を設け、郷土を愛する生徒を育成したいと考え、授業実践を行った。

2 実践の内容・方法

(1) 社会科地理的分野「四国地方」での授業実践

① 単元の構成について

本単元では、まず、1時間目に四国地方の地形について学習をし、四国は「島」であることから、四国に橋が必要だった理由を考えた。その後、単元を貫く問い合わせ「四国地方にとって橋はどのような存在なのか」を設定し、2・3時間目には生活面から、4・5時間目には産業面から橋ができる前とできた後の四国の変化について、様々な資料を基に考察した。さらに、6時間目には、橋がどのように管理されているかを学び、7時間



【授業の様子】

目では、本州四国連絡橋を維持するために年間約200億円必要であることから、「なぜ200億円かけて橋を維持しているのか」という学習課題を設定し、四国にとって橋が必要な理由を、これまで単元を通して学んできたことを基に考えた。

資料①②③から、瀬戸大橋のおかげで、頻度を保った往来ができます。瀬戸大橋ができる前より、出荷量や生産量が何倍も増加していることが分かる。また、資料④⑤から、観光客数が増え、瀬戸大橋を利用していることが分かる。

資料⑥から、瀬戸大橋は今まで多くの人が利用し、そして瀬戸大橋が使えないなくなってしまうと困る人がたくさんいる。

資料⑦～⑩を見ると、四国産の食べ物が高価で、他の地域に運ばれていて、そこに住む人の生活を支える存在でもある。

【単元で学んだことから自分の考えを書いた生徒のワークシート】

生徒は、前時までに使用した資料などを活用しながら、産業面や経済面、生活面など、多面的に橋の価値について自分の考えをまとめていた。そして、授業の後半には、本州四国連絡高速道路株式会社（以下「本四高速」）へのインタビュー動画を視聴することで、橋は人や物を運ぶだけでなく、災害時の緊急輸送道路としての

役割や、光通信ケーブル、送電線、送水管等のインフラ設備もあり、島である四国にとって本州と繋がるライフラインであるという新たな視点を獲得した。

生徒は、単元を通して、四国地方にとって橋は経済を発展させたり、生活を豊かにしたりしただけでなく、四国地方で暮らす人々の命を繋いでいる必要不可欠な存在であるということに気付くことができた。

② 単元構造図の活用

今回、社会科で授業をするにあたり、地理的な見方・考え方を働かせた深い学びができるよう、単元構造図を作成し、活用した。単元構造図とは、単元の学習内容の構造化を通して、中心概念やそれを取り巻く概念のつながりを考え、単元の組み立てを明らかにするものである。授業開発の段階から、単元を構成する中心概念と様々な学習内容の結びつきを考え、単元を通して学習を構造的に組み立てることで、単元を学び終えた生徒の姿を明確にして授業を行うことができた。

また、単元構造図の中に「地理的な見方・考え方」を明記することで、地理的分野の特色を明白にすることとした。単元を貫く課題を解決するために、「地理的な見方・考え方」をどの授業で、どのように働くのかをあらかじめ設定することによって、生徒に身に付けさせたい力を明確にして、授業に臨むことができた。

(2) 道徳科「生涯志を貫いた眞のリーダー 杉田秀夫」

(坂出市教育委員会読み物資料「志をはぐくむ」より)での授業実践

道徳科の授業では、瀬戸大橋の建設に貢献した杉田秀夫さんについて学習した。丸亀市出身の杉田さんは、「必ず橋を架ける」という強い意志で、数々の困難を乗り越え、この大事業をやり遂げた。普段利用している瀬戸大橋が造られた経緯や、たくさんの人の苦労によって完成したものであることを知り、生徒たちは瀬戸大橋が地元坂出にあることを誇りに思うとともに、これからも大切にしていきたいという気持ちを強くもち、感想にまとめていた。



【橋の存在意義について考える生徒】



【作成した単元構造図】



【道徳科での授業の様子】

(3) 濑戸大橋体験学習への参加

坂出市ふるさと理解推進事業の一環として、本四高速坂出管理センターのご協力のもと、瀬戸大橋体験学習が実施され、2年生が参加した。バックヤードツアーでは、普段は見ることができない場所を見学し、本四高速の方から橋の構造の工夫や維持管理についての話を聞いた。生徒たちは、実際に橋を歩くことで、その壮大さを体感するとともに、橋が私たちの生活に与えている社会的、経済的、文化的影響とその意義について考えるきっかけとなった。



【バックヤードツアーの様子】

【生徒の感想の例】

橋があることが当たり前だと思っていたけれど、瀬戸大橋を200年使い続けられるように、日々点検をしてくださっている方がいることを知り、橋のありがたみを感じました。これからは橋を大切に考えるとともに、感謝の気持ちをもって橋を利用したいと思います。

3 実践の成果

(1) 生徒の変容

学習前、多くの生徒が橋はあって当たり前だと思っていたが、学習を通して、四国地方にとって橋は、人や物を運ぶだけではなく、いざという時に四国人々を守ってくれる命綱であることを学んだ。そして、その橋の一つである瀬戸大橋が、自分たちの住んでいる町にあることが誇らしく感じるようになった。昨年度授業を行った学年に今年度アンケートを行ったところ、「坂出市の良いところを3つ答えましょう」という質問に対して、多くの生徒が「瀬戸大橋」について書いていた。これは、社会科の授業や道徳科の授業、体験学習など、様々な経験の中で瀬戸大橋について考える機会を設けた成果だと感じている。

(2) 教員の変容

私自身も坂出市で生まれ育ち、学生時代には通学で瀬戸大橋を使っていたため、以前から瀬戸大橋の有難さを感じており、もっと子どもたちに瀬戸大橋の魅力を伝えたいと思っていた。今回の実践を通して、教材研究を重ねる中で、瀬戸大橋の歴史や四国に与えた影響など、知らなかったことがたくさんあり、それらを学んだことで、今まで以上に瀬戸大橋が好きになった。



【瀬戸大橋の見学を楽しむ生徒の様子】

中でも、私の橋に対する見方が大きく変わったのは、本四高速の方から国土交通省の定めている「四国おうぎ（扇）作戦」を教えていただいたときである。この矢印は、四国の太平洋側で南海トラフ地震などが発生した時、救助や支援に向かうためのルートを表している。特に、この瀬戸内海上の矢印は本州と四国をつなぐ橋を表しており、「もし、この橋がなかつたら…」と考えると、橋は四国にとって、ただの交通網ではないことを強く感じた。このように、地元企業と連携を図ることで、専門的な知識や確かな情報を得ることができ、授業の構成も大きく変化していった。

これらの経験から、今後も教員として、地域と学校を繋ぐ架け橋となり、郷土を愛し、誇りに思う生徒を育てたいと強く思うようになった。



国土交通省 四国地方整備局
「四国おうぎ（扇）作戦」を一部加工

4 普及させたい取組と期待される効果

(1) 地元教材を活かした授業づくり

郷土を愛する生徒を育成するために、生きた教材である地元教材を積極的に活用することが大切であると考える。

今回、実践をするにあたって、瀬戸大橋の管理用通路や塔頂を4回見学した。自分で足を運び、自分の目で実際に本物を見て学ぶことができたからこそ、今回の実践が実現したと思っている。また、本四高速で働く方と授業の構成について話し合う機会を用意していただき、橋を利用する立場での視点だけでなく、橋を維持する立場での視点から、授業を考えることができた。

(2) 社会科における単元構造図の活用

単元構造図を作成するためには、入念な教材研究が必要不可欠であるが、単元を学び終えた時の生徒の姿をイメージしながら、授業を進めていくことは、生徒にとっても教員にとっても一時間単位では得られない深い学びがあると考える。若年教員の一人である私も、単元構造図を作成したことで、生徒の深い学びを実現するというゴールに向かって、毎時間の授業を行うのが楽しいと感じた。また、単元を通して、授業をあらかじめデザインしておくことで、毎時の授業もブラッシュアップされて、ゆとりをもって授業に臨むことができた。



【本校の社会科教員で瀬戸大橋を視察する様子】

5 課題及び今後の取組の方向

今回の実践を、いかに継続していくかが、今後の課題である。教室から瀬戸大橋が見える本校で、これからも瀬戸大橋とともに生きていく子どもたちに、瀬戸大橋の価値や存在意義を伝え続けていけるよう、教員間での共有を図りたいと思う。また、私自身が今回の経験を活かし、郷土を愛する生徒の育成をめざした授業づくりに尽力していこうと思う。